

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

性行動に伴う危険を予防するプログラムの効果：
性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を
育成する教育を組み合わせ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): adolescent, dating, domestic violence, prevention, education 作成者: 永松, 美雪, 原, 健一, 中河, 亜希, 中野, 理佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/621

原 著

性行動に伴う危険を予防するプログラムの効果

: 性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組み合わせ

Efficacy of the program for the prevention of risky sexual behavior

: combined education on cultivating mutual respect between both sexes and preventing sexually transmitted diseases

永松美雪¹⁾ 原 健一²⁾ 中河亜希¹⁾ 中野理佳³⁾

1) 佐賀大学医学部看護学科母子看護学講座, 2) 佐賀県DV総合対策センター, 3) 佐賀大学附属病院看護部

1) Miyuki NAGAMATSU, Aki NAKAGAWA: Department of Maternal and Child Nursing, Faculty of Medicine, Saga University, 2) Kenichi HARA: Saga Prefectural Center for General Countermeasure, Against Domestic Violence, 3) Rika NAKANO: Nursing Department, Saga University Hospital

抄 録 : 性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組み合わせた効果を明らかにすることを目的とした。調査対象は、A県の10中学校に在籍する中学生1,335人とした。男女交際中の暴力予防教育と性感染症予防教育を組み合わせるを受けた生徒と性感染症予防教育のみを受けた生徒の実施前と実施3か月後の変化を比較した。調査内容は、親との会話の頻度、中学校の教員との会話の頻度、男女交際中の暴力認知、男女交際における意識、性感染症の知識、性行為に対する意識、性行為などの経験である。教育前後の調査に参加した生徒1,138人(回答率85.2%)を分析した。両教育は、親と生徒の課題学習、教員と生徒のグループ学習、専門家による講演と個別相談を含んだ。男女交際中の暴力予防教育を組み合わせるを受けた生徒は、性感染症予防教育のみを受けた生徒より、実施前と実施3か月後の変化において教員との会話の頻度を増やし、男女交際中の暴力の認知や性感染症の知識を高め、男女交際において男女の対等な関係、相手を思いやること、自分を思いやるという意識を高める効果が認められた。

Synopsis : This study was conducted to clarify the efficacy of combined education on cultivating mutual respect between both sexes and preventing sexually transmitted diseases from the viewpoint of prevention of risky sexual behavior while dating. The subjects were 1,335 students of 10 junior high schools in A Prefecture. The subjects were divided into two groups: one was given combined education on preventing dating domestic violence and preventing sexually transmitted diseases, and the other was given education on sexually transmitted diseases prevention only. Both education included a task study for parents and students, group study by teachers and students, lectures by experts, and individual counseling.

The subjects' pre-education behavior and behavior in three months after the education were compared. Behavioral changes of 1,138 adolescent students were analyzed from the following aspects: frequency of conversation with parents, frequency of conversation with junior high school teachers, acknowledgement of violence while dating, awareness about dating, knowledge of sexually transmitted diseases, and experience of sexual intercourse. The response rate was 85.2%. The findings revealed that the students who received combined education showed higher frequency of conversation with teachers, more awareness about dating domestic violence, more knowledge of sexually transmitted diseases, and more recognition of "gender equality," "care for others" and "self-esteem" while dating, in comparison to students who received a single issue education on sexually transmitted diseases prevention.

These results suggest that combining the education on prevention of violence with that on prevention of sexually transmitted diseases is effective for enhancing adolescent students' awareness about gender equality while dating.

Key words : adolescent, dating, domestic violence, prevention, education.

I. 緒言

思春期は、自我や価値観の確立過程にあり、親からの自立に向けて、不安定な心理状態にあるため、環境や他者との関係性の中でさまざまな影響を受けながら成長発達していく。近年の諸外国の研究から、思春期の性行動は、青年自身の要因に限らず、交際相手、仲間、学校、家庭や地域など、青年を取り巻く環境の要因が影響されていることが明らかになっている^{1,2)}。日本において青年の性交経験率は、中学生（13から15歳）から高等学校生（16から18歳）にかけて、男子では3.6%から26.6%へ、女子では4.2%から30.0%へと急激に上昇する³⁾。そのため、性行動を開始する前の中学生を対象に、性行動に伴う危険として男女関係の中で起こる暴力、妊娠や性感染症などの予防教育を学校と家庭で連携して行っていく必要がある。

米国では、(Dating Domestic Violence) デートDV)と言われる男女交際中の暴力は学校危機の1つとして、学校が積極的に予防教育を行うべき問題ととらえられているが⁴⁾、日本では、男女交際中の暴力に特化した実証性のある教育は、まだ十分に行われていないのが現状である⁵⁾。加害者と被害者の双方に男女交際中の暴力に関する知識がなければ、自らの行為を改めることも、暴力から逃げることもできない^{6,7)}。まず「知る」ということが男女交際中の暴力予防になり、男女がお互いを尊重することにつながると考える。男女交際が発展して性行動を開始する生徒が増加する前の中学生に、男女がお互いを尊重する関係をつくるための暴力予防教育や支援が必要である。しかし、わが国では、中学生への男女交際中の暴力予防の取り組みは、まだ十分に行われていない。中学校の性に関する教育は、保健体育科の授業として、中学1年生に「体の発育・発達、性機能の成熟」、中学3年生に「性感染症の予防」が教育されている。しかし、男女交際のあり方、男女交際中に起こる暴力やその予防・支援を求める方法は教えられていない。

従来の知識習得教育では、行動に変容が認めな

いものに対して、近年、社会的学習理論を活用した生徒の健康な行動変容を目的に認知過程を重視した効果的なプログラムがある^{8,10)}。男女の関係性において、男女がお互いを尊重する関係育成する教育を受けることは、男女交際中の暴力の加害者・被害者をつくらないこと、さらに望まない妊娠や性感染症を減らすことにつながると考えられる。現在までに日本で男女交際中の暴力やジェンダーについての教育は、大学生や高校生へ専門家やボランティアによって、講義形式および体験型学習の手法を用いて行われている^{15,19)}。しかし、いずれの予防プログラムの紹介や報告は認めるが、教育の評価が示されていない。

また、親間の暴力を目撃した子どもや親からの虐待を受けた子どもは、感情・行動・認知・発達上の問題があると報告されている⁹⁾。子ども時代に暴力的な家庭で育った子どもは、思春期の仲間に対して暴力的な対応となる傾向にあり、異性との交際により暴力に影響しやすいことが示されている⁷⁾。これらのことより、教育と同時に、男女交際におけるトラブルがある生徒に対して、個別相談を実施して、学校と家庭が連携して支援していくことが重要であると考えられる。野坂は、集団へのアプローチに加え個別対応など、日本の若者のニーズに対応したより有効なプログラムを検討していくことが望まれると述べている⁹⁾。最近のある研究は、性行動開始に関連する要因を減少させる目的で、中学生へ専門家による講演に加え、親による教育、教員による教育、生徒への個別相談を実施したプログラムにより、生徒の知識や意識に効果を認めた²⁰⁾。本研究は、性行動に伴う危険を予防するために、性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組み合わせた効果を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 研究対象

本研究における参加者は佐賀県予防教育事業(性行動に伴う危険を予防する中学生向けプログラム)に新たに参加した中学校のうち学校長の研究承認が得られた10中学校の生徒に調査を行っ

た。在籍する中学生1,335人の保護者へ説明書・同意書を配布し、保護者の同意および本人の同意が得られ実施前後の調査に参加した生徒を研究対象とした。

2. 研究方法

1) 調査期間と調査方法

調査期間は21年5月から23年3月までである。研究者は、教育前に学校の教師に説明書、調査票および同意書を配布した。説明書には、調査票の配布方法や回収方法を記載した。調査票は守秘義務を重視し、密封させて回収した。同意書には、研究の目的として、授業の前後に無記名の調査を行い、授業や取り組みの効果について調べること、データの守秘性、参加を拒否できること、研究者の連絡先を詳細に記載した。調査の前に、親へ生徒を通じて、説明書と同意書を渡した。親がいない生徒の場合、保護者（生徒を養育している成人の家族メンバー）の同意を得た。加えて、生徒の同意が得られた場合に無記名式の調査を実施した。無記名の調査のために実施前と実施後で対応したデータではない。保護者と生徒の同意が得られた生徒や実施前調査に参加できなかった生徒を学校の教師に把握してもらい、同じ生徒に実施後調査を行う工夫を行った。実施後調査は、すべての教育が終了して3か月以降に行った。本研究計画は、佐賀大学医学部倫理委員会に提出し研究承認を得て実施した。

2) 教育方法

中学校保健体育科の学習指導要領において、性感染症予防教育は必須であるが、暴力予防教育は必須ではない。性感染症予防教育のみを受けるか男女交際中の暴力予防教育と性感染症予防教育の両方を受けるかは中学校の教員間で検討後に最終的に学校長に選択してもらった。男女交際中の暴力予防教育と性感染症予防教育の各プログラムは、親と生徒の課題学習、教員と生徒のグループ学習、専門家による講演と個別相談を含んだ。

A. 男女交際中の暴力予防教育

(1) 親と生徒の課題学習

親子間のコミュニケーションを高める目的で自宅学習シートを用いて生徒から保護者に以下の①

②③をインタビューして、生徒が④⑤を考えるものである（資料1）。

①思いやりのある関係とはどんな関係？

②対等な関係とはどんな関係？

③人間として尊敬できる人のタイプはどんな人？


④あなたは、どんな人になりたいと思いますか？

⑤あなたは、将来大人になったら、どんな相手と結婚したいですか？

(2) 教員と生徒のグループ学習

事前打ち合わせ：専門家によりクラス教員とクラス代表生徒各4人を対象に60分の事前打ち合わせを行い、小集団グループ学習の主旨、司会・進行の役割と内容を説明する。

グループ学習：男女交際における拒絶と交渉のコミュニケーションスキルを高めるために「対等

自宅学習シート 「相手を思いやり自分を大切する」	
年 組 (男子 女子) 氏名	
<p>①②③の質問を身近な大人にインタビューしよう！ (中学校の先生以外の大人) あなた自身で、考えたことを書いてみましょう。 一番下は、あなた自身で、考えて書いてみよう。</p>	 <p>③人間として尊敬できる人のタイプは？ 身近な大人は、どんなタイプの人を尊敬できますか？</p>
<p>①思いやりのある関係とはどんな関係？ 身近な大人がイメージすることは？</p> <p>あなたがイメージすることは？</p>	
<p>②対等な関係とはどんな関係？ 身近な大人がイメージすることは？</p> <p>あなたがイメージすることは？</p>	
<p>あなたは、どんな人になりたいと思いますか？</p> <p>あなたは、将来、大人になったら、どんな相手と結婚したいですか？</p>	

資料1

な関係とは」のテーマで50分間話し合う。その方法は、クラス代表生徒4人の司会・進行により5～6人の生徒が小グループになり、学習シートの事例を用いてロールプレーにより、起こる可能性がある危険とそれを避ける会話について話し合い、最後にグループごとに発表する。クラス教員は、クラス代表生徒のサポートを行いながら生徒の話し合いを見守る役割がある（資料2）。

(3) 専門家による講演と個別相談

生徒への集団教育：「相手を思いやり自分を大切に」をテーマに、生徒へ専門家が50分間で、実際にあった事例のDVDやスライドを活用して、以下の内容を説明する。

- ①実際の男女に起こった事件（DVD）
- ②事件の原因、暴力の種類
- ③被害者・加害者の気持ち
- ④暴力のメカニズム


- ⑤思いやりのある関係とは？
- ⑥対等な関係とは？
- ⑦より良い関係を築くための方法
- ⑧自分の気持ちを正直に話す方法
- ⑨Iメッセージを使おう！（事例を使用）
- ⑩実際に起きた事件のその後
- ⑪暴力が起こった時の対応方法

生徒への個別相談：講義後に記名された感想文をもとに、授業内容に疑問がある生徒や相談内容が記載されている生徒に対して、担任教諭や養護教諭と協力して専門家が個別相談を実施する。

B. 性感染症予防教育

(1) 親と生徒の課題学習

親子間のコミュニケーションを高める目的で自宅学習シートを用いて生徒から保護者に以下の内容①②③をインタビューして、生徒は③を考えるものである。

学習シート1		対等な関係とは	
年 組 (男子 女子) 氏名 _____			
事例 ある中学生の女子と男子の会話			
男子：今度の土曜日に会わない？ 二人だけで、カラオケに行こうよ。			
女子：うーん、その日、親と出かける約束なんだよね。			
男子：そんな「用事ができたから」って言えばいいじゃん。			
女子：え～！以前から約束してたし、私も楽しみにしてたんだよ。			
それに、親にウソをつくのは嫌だな。			
男子：せっかく俺も時間作ったんだからさ！			
女子：でも、カラオケは校則で禁止されているでしょ？			
他の日に別の場所へ行くのはダメなの？			
男子：俺たち付き合っているんだろ？ 普通、男の言うことを聞くんじゃない？			
女子：どうしよう・・・決められないよ。			
男子：何度も言わせるなよ！俺の言う通りにすればいいんだ！			
女子：わかった・・・言うとおりにするよ。			
1. この女子と男子は、それぞれにどんな気持ちをもったと思いますか？			
女子の気持ち			
<input type="text"/>			
男子の気持ち			
<input type="text"/>			
			

学習シート2	
2. もし、二人だけで、カラオケに行ったら、どんな危険がありそうですか？	
<input type="text"/>	
3. この男子は、どういふふうと言ったら、良かったと思いますか？ 相手への対等な気持ちを表すせりふを考えてみましょう。	
この女子は、どういふふうと言ったら、良かったと思いますか？ 正直に自分の気持ちを伝えるせりふを考えてみましょう。	
事例 中学生の女子と男子の会話を変えてみましょう！	
男子：今度の土曜日に会わない！ 二人だけで、カラオケに行ってみようよ？	
女子：うーん、その日、親と出かける約束なんだよね。	
男子：	<input type="text"/>
女子：	<input type="text"/>
男子：	<input type="text"/>
女子：	<input type="text"/>
男子：	<input type="text"/>
女子：	<input type="text"/>

- ①「エイズ」についてどんなことを知っていますか？
- ②今まで、一緒に過ごすなかで怪我や病気等、あなたや周囲の人の「命」や「健康」の危険を感じたことがありましたか？それはどんなことでしたか？
- ③よく知らない相手や年上の相手と付き合うことは、どんな危険があるのでしょうか？

(2)教員と生徒のグループ学習

グループ学習：男女交際における拒絶と交渉のコミュニケーションスキルを高めるために「よく知らない年上の相手との交際について」のテーマで50分間話し合う。クラス代表生徒4人の司会・進行により5～6人の生徒が小グループになり、学習シートの事例を用いてロールプレーにより、起こる可能性がある危険とそれを避ける会話について話し合い、最後にグループごとに発表する。クラス教員は、クラス代表生徒のサポートを行いながら生徒の話し合いを見守る役割がある。

(3)専門家による講演と個別相談

生徒への集団教育：「エイズを通して命を考える」をテーマに、生徒へ専門家が50分間で実際にあった事例のDVDやスライドを活用して、以下の内容を説明する。

- ①エイズの発症とその経過 (DVD)
- ②HIV感染者・エイズ患者の世界・日本の現状
- ③HIV感染経路
- ④HIV感染の検査
- ⑤HIV感染者の治療
- ⑥HIV感染予防
- ⑦他の性感染症と予防
- ⑧HIV感染者の声
- ⑨HIV感染者の友人・家族からのメッセージ

生徒への個別相談：講義後に記名された感想文をもとに、授業内容に疑問がある生徒や相談内容が記載されている生徒に対して、担任教諭や養護教諭と協力して専門家が個別相談を実施する。

3)調査内容

(1)親との会話頻度

独自に作成した4項目の質問票を使用した²⁰⁾。親と生徒の課題学習の影響を確認するために、実

表1 男女交際中の暴力認知

-
- 1) たたいたりして、けがをさせる
 - 2) けがをしない程度に、たたいたり、けったりする
 - 3) 突き飛ばしたり、ものを投げつけたりする
 - 4) ものをこわしたり、なぐるふりをする
 - 5) 大声でどなる
 - 6) バカにしたり、心が傷つくようなことを言う
 - 7) 何を言っても、相手にせず無視する
 - 8) 監視したり、外出させなかったりして行動の自由を奪う
 - 9) 性行為やキスを断われなくする
 - 10) 他の異性と話をしたり、親しげにしたりすることを怒る
-

施前と実施3か月後に親との会話頻度を評価した。質問票には、親がいない一部の生徒を考慮して、保護者と表現を統一した。①この3か月間、保護者と話しましたか？(この質問は保護者との「日常会話」の頻度を尋ねるものである)②この3か月間、保護者と「命の大切さ」について話しましたか？③この3か月間、保護者と「健康の大切さ」について話しましたか？④この3か月間、保護者はあなたの意見を聞いてくれましたか？会話の頻度を1=まったく話さない(または聞かない)、2=ほとんど話さない、3=たまに話す、4=よく話す、から選択する。会話頻度が多くなるほど、点数を高く設定している。

(2)教員との会話頻度

教員と生徒のグループ学習の影響を確認するために、実施前と実施3か月後に中学校の教員との会話頻度を評価した。保護者の会話頻度の質問項目を中学校の教員に置き換えて同様の内容を尋ねた。

(3)男女交際中の暴力認知(合計10点)(表1)

内閣府の調査により「デートDV」に当たる身体的暴力、精神的暴力、性的暴力の内容をもとに²⁰⁾、著者(佐賀県DV総合対策センター所長)により、80高等学校の19,398人の高校生による教育前後の調査に使用した質問票を参考に作成した中学生版質問票を数人の中学生によるプレテストを行った後に使用した。男女交際において相手に対して行われる場合、10項目の内容に対して、それが暴力に当たると思うかを尋ねた²¹⁾。この質問は、暴

力に当たるか暴力に当たらないか二者択一である。10項目の合計点を男女交際における暴力認知得点としている。得点は、0から10までの得点になる。実施前と実施3か月後に評価した。

(4)男女交際の意識

独自に作成した3項目の質問票を使用した²⁰⁾。実施前と実施3か月後に評価した。①男女交際において男女の対等な関係は、どの程度大切であると思いますか？②男女交際において相手を思いやることは、どの程度大切であると思いますか？③男女交際において自分を思いやることは、どの程度大切であると思いますか？の質問に対して、1=大切でない、2=あまり大切でない、3=少し大切である、4=大切である、から選択する。大切に考える程度が高くなるほど、点数を高く設定している。

(5) 性感染症の知識

Kelly, J.A.ら²⁰⁾の尺度をもとにした日本語版を使用した。その尺度は、2003年に松本と武田によって²⁰⁾、日本の文化や環境にあうように翻訳され日本の大学生・高校生を対象に使用されている。その尺度の中で特に14項目「HIV/AIDSに関する知識評価尺度」は、信頼性が高いことが証明されている ($\alpha = .67$)²⁰⁾。われわれは、この尺度をもとに、13-14年歳の対象者にプレテストを実施して、14項目のうち4項目において低い正解率を示した。そのため中学生の学習指導要領の内容を確認して10項目の簡易尺度を作成した。そして、中学生に適した尺度であることを確認した ($\alpha = .69$)²⁰⁾。この質問は、正誤の二者択一である。10項目の合計点を性感染症の知識得点としている。得点は、0から10までの得点になる。

(6)性行為の意識

①中学生時の性行為に対する現在の意識

独自に作成した質問票を用いて、実施前と実施3か月後に評価した²⁰⁾。“あなたは、あなた自身が中学生の時に、性行為をすることをどう考えていますか？”この質問に対して、1=かまわない、2=少しはかまわない、3=あまりよくない、4=よくない、のいずれかで答えるものである。中学生時の性行為を拒否しているほど、点数を高

く設定している。

②高校生時の性行為に対する将来の意識

著者らが独自に作成した質問票を用いて、実施前と実施3か月後に評価した。“あなたは、あなた自身が高校生の時に、性行為をすることをどう考えていますか？”この質問に対して、1=かまわない、2=少しはかまわない、3=あまりよくない、4=よくない、のいずれかで答えるものである。高校生時の性行為を拒否しているほど、点数を高く設定している。

③性行為を誘われた時に拒否する意識

著者らが独自に作成した質問票を用いて、教育前と教育3か月後に評価した。“あなたは、性行為をすることを誘われた時に、ことわる自信がありますか？”この質問に対して、1=自信がない、2=あまり自信がない、3=少しは自信がある、4=自信がある、のいずれかで答えるものである。性行為を誘われた時に拒否する自信があるほど点数を高く設定している。

(7)危険行動(飲酒,喫煙,性行動)

思春期の問題行動に対して、飲酒,喫煙,性行動について、実施前と実施3か月後に評価した。“この3か月間、お酒を飲んだ経験がありましたか？”, “この3か月間、タバコを吸った経験がありましたか？” “この3か月間、性行為の経験がありましたか？”, “今までに、性行為の経験がありましたか？”この質問に経験がないか経験があるかを尋ねた。

4)分析方法

男女交際中の暴力予防教育と性感染症予防教育の両方を受けた生徒(以後、両教育群と略す)と、性感染症予防教育のみを受けた生徒(以後、性感染症教育群と略す)を以下の方法で比較検討した。まず、第1段階として、両教育群と性感染症教育群のそれぞれの実施前と実施3か月後の変化、実施前と実施3か月後における教育間の差を比較した。その方法として、親との会話頻度、教員との会話頻度、男女交際の意識、性行為の意識、男女交際中の暴力認知合計得点、性感染症の知識得点等、量的データは、マン・ホイットニのU検定にて比較した。飲酒,喫煙,性行為を経験した生

表2 実施前と実施3ヵ月後の男女交際の暴力・性感染症予防教育と性感染症予防教育のみの教育間比較

	男女交際の暴力・性感染症予防教育 n=603			性感染症予防教育のみ n=535			教育間の比較	
	実施前 Mean (SD)	実施 3ヵ月後 Mean (SD)	実施前後 の変化 p value	実施前 Mean (SD)	実施 3ヵ月後 Mean (SD)	実施前後 の変化 p value	実施前 p value	実施 3ヵ月後 p value
過去3ヵ月間の親との会話頻度 (1-4)								
日常会話	3.72 (0.52)	3.68 (0.54)	0.222	3.66 (0.55)	3.62 (0.60)	0.225	0.045	0.084
命の大切さを話す	1.69 (0.75)	1.73 (0.76)	0.398	1.71 (0.76)	1.69 (0.76)	0.625	0.734	0.278
健康の大切さを話す	2.08 (0.92)	2.24 (0.91)	0.002	2.08 (0.88)	2.17 (0.91)	0.337	0.934	0.167
子どもの意見を聞く	3.20 (0.77)	3.36 (0.74)	<0.001	3.24 (0.76)	3.20 (0.79)	<0.001	0.289	<0.001
過去3ヵ月間の教員との会話頻度 (1-4)								
日常会話	3.09 (0.78)	3.14 (0.72)	0.250	3.10 (0.69)	2.96 (0.76)	0.003	0.708	<0.001
命の大切さを話す	1.82 (0.79)	1.81 (0.73)	0.842	1.93 (0.86)	1.78 (0.78)	0.003	0.045	0.276
健康の大切さを話す	1.89 (0.78)	2.01 (0.85)	<0.001	2.02 (0.86)	1.96 (0.85)	0.247	0.014	0.028
子どもの意見を聞く	2.93 (0.81)	3.11 (0.80)	<0.001	3.02 (0.81)	2.95 (0.85)	0.184	0.059	0.002
男女交際の暴力認知 (1-10)								
男女交際の暴力認知 (1-4)	6.96 (2.61)	7.96 (2.17)	<0.001	7.14 (2.38)	7.58 (2.31)	<0.001	0.001	0.240
男女の対等な関係								
男女の対等な関係	3.37 (0.66)	3.71 (0.54)	<0.001	3.53 (0.61)	3.61 (0.62)	0.033	<0.001	0.008
相手を思いやる								
相手を思いやる	3.60 (0.59)	3.86 (0.41)	<0.001	3.75 (0.48)	3.80 (0.48)	0.081	<0.001	0.013
自分を思いやる								
自分を思いやる	3.24 (0.65)	3.43 (0.65)	<0.001	3.23 (0.65)	3.28 (0.71)	0.184	0.672	<0.001
性感染症の知識 (1-10)								
性感染症の知識 (1-4)	5.76 (2.21)	7.85 (1.76)	<0.001	6.96 (1.89)	7.63 (1.82)	<0.001	<0.001	0.028
性行為の意識 (1-4)								
中学生時の性行為を拒否する意識	3.09 (0.87)	3.17 (0.90)	0.121	3.14 (0.88)	3.09 (0.94)	0.348	0.263	0.145
高校生時の性行為を拒否する意識	2.75 (0.97)	2.81 (0.98)	0.294	2.74 (0.99)	2.75 (0.99)	0.848	0.921	0.328
性行為を誘われた時に拒否する意識	2.94 (0.89)	3.14 (0.90)	0.050	3.02 (0.86)	3.03 (0.92)	0.902	0.154	0.866
危険行動								
	%	%	p value	%	%	p value	p value	p value
過去3ヵ月間の飲酒経験率	13.1	24.8	<0.001	19.5	26.1	0.011	0.004	0.637
過去3ヵ月間の喫煙経験率	1.7	2.9	0.242	3.4	6.3	0.035	0.083	0.007
過去3ヵ月間の性行為経験率	1.7	3.2	0.132	1.0	3.8	0.003	0.308	0.632
今までの性行為経験率	3.1	4.9	0.138	2.5	4.9	0.052	0.587	1.000

実施前後の変化、教育間の実施前、実施後において、量的データをマン・ホイットニのU検定、質的データにフィッシャー直接確率計算法を使用して比較した。

徒の割合等、質的データは、フィッシャー直接確率計算法により比較した(表2)。第2段階として、各教育の実施前と実施3ヵ月後の変化、教育間の変化について、量的データを重回帰分析で、質的データをロジスティック回帰分析によって多変量解析を行った(表3)。検定はthe Statistical Package for the Social Sciences (SPSS 17.0)を使用した。有意差は $p < 0.05$ に設定した。

Ⅲ. 結果(表2, 表3)

教育前後の調査に参加した生徒は、1,138人(回答率85.2%)であった。そのうち両教育群の生徒は、603人(53.0%)、性感染症教育群の生徒は535人(47.0%)であった。

1. 親・教員との会話頻度

親との会話頻度のうち「日常会話」において、実施前に両教育群は、性感染症教育群より会話頻度が高かったが、実施後に有意な差を認めず、教育間変化の差を示さなかった。また、「命の大切さを話す」や「健康の大切さを話す」頻度は、実施前、実施後、教育間変化の何れにおいても差を認めなかった。しかし、「子どもの意見を聞く」頻度は、実施前には教育間に差がなかったが、実施後に性感染症教育群より両教育群が頻度を高めた。性感染症教育群は、実施前より実施後に「子どもの意見を聞く」頻度が減っている。教育間で実施前後の変化に有意差があることを示した($p < 0.001$)。

表3 男女交際中の暴力・性感染症予防教育と性感染症予防教育のみの教育間変化の比較

	男女交際中の暴力・性感染症予防教育 n=603			性感染症予防教育のみ n=535			教育間の比較		
	実施前と実施3ヵ月後の比較 R2	β	p value	実施前と実施3ヵ月後の比較 R2	β	p value	R2	β	p value
過去3ヵ月間の親との会話頻度 (1-4)									
日常会話	0.001	-0.035	0.222	0.001	-0.037	0.225	0.001	0.011	0.602
命の大切さを話す	0.001	0.024	0.398	0.001	-0.015	0.625	0.001	0.019	0.357
健康の大切さを話す	0.007	0.088	0.002	0.001	0.048	0.109	0.004	0.063	0.002
子どもの意見を聞く	0.011	0.108	<0.001	0.001	-0.028	0.359	0.007	0.087	<0.001
過去3ヵ月間の教員との会話頻度 (1-4)									
日常会話	0.001	0.033	0.250	0.007	-0.091	0.003	0.002	0.052	0.012
命の大切さを話す	0.001	-0.006	0.842	0.007	-0.090	0.003	0.001	-0.017	0.411
健康の大切さを話す	0.011	0.109	<0.001	0.001	-0.035	0.247	0.003	0.060	0.004
子どもの意見を聞く	0.011	0.108	<0.001	0.001	-0.041	0.185	0.005	0.076	<0.001
男女交際中の暴力認知 (1-10)	0.070	0.266	<0.001	0.008	0.94	0.002	0.013	0.117	<0.001
男女交際の意識 (1-4)									
男女の対等な関係	0.070	0.266	<0.001	0.003	0.065	0.033	0.020	0.144	<0.001
相手を思いやる	0.059	0.244	<0.001	0.002	0.053	0.081	0.016	0.126	<0.001
自分を思いやる	0.020	0.142	<0.001	0.001	0.040	0.184	0.014	0.118	<0.001
性感染症の知識 (1-10)	0.216	0.465	<0.001	0.031	1.770	<0.001	0.051	0.226	<0.001
性行為の意識 (1-4)									
中学生時の性行為を拒否する意識	0.001	0.046	0.121	0.001	0.029	0.350	0.001	0.033	0.123
高校生時の性行為を拒否する意識	0.001	0.031	0.295	0.001	0.006	0.848	0.001	0.030	0.171
性行為を誘われた時に拒否する意識	0.002	0.058	0.051	0.001	0.004	0.904	0.001	0.024	0.273
危険行動									
	OR	95%CI	p value	OR	95%CI	p value	OR	95%CI	p value
過去3ヵ月間の飲酒経験率	2.196	1.622-2.974	<0.001	1.460	1.095-1.946	0.010	1.368	1.096-1.708	0.060
過去3ヵ月間の喫煙経験率	1.712	0.777-3.770	0.182	1.878	1.050-3.359	0.034	0.754	0.437-1.298	0.308
過去3ヵ月間の性行為経験率	1.880	0.867-4.079	0.110	4.048	1.513-10.802	0.005	1.493	0.849-2.624	0.164
今までの性行為経験率	1.594	0.875-2.903	0.128	1.998	1.020-3.915	0.044	1.414	0.896-2.232	0.136

実施前後の変化、教育間の実施前後の変化において、量的データを重回帰分析、質的データにロジスティック分析を使用して比較した。

R2: 調整済み R2 乗 β : 標準化係数 OR: オッズ比 CI: オッズ比の信頼区間

教員との会話頻度のうち「日常会話」において、実施前に両教育群と性感染症教育群は差を認めなかった。性感染症教育群の「日常会話」の頻度が実施前より実施後に低下した。実施後に教育間で「日常会話」の頻度に有意な差を認め、教育間で実施前後の変化に有意差を示した ($p < 0.05$)。「命の大切さを話す」頻度において、実施前に両教育群は、性感染症教育群より会話頻度が低く、実施後に有意な差を認めず、教育間変化の差を示さなかった。「健康の大切さを話す」頻度は、実施前に両教育群は、性感染症教育群より会話頻度が低かった。性感染症教育群の「健康の大切さを話す」頻度が実施前より実施後に低下した。実施後に教育間で「健康の大切さを話す」頻度に有意な差を認め、教育間で実施前後の変化に有意差を示した ($p < 0.01$)。教員との「子どもの意見を

聞く」頻度において、実施前に教育間に差がなかったが、実施後に性感染症教育群より両教育群が頻度を高めた。性感染症教育群は、実施前より実施後で「子どもの意見を聞く」頻度が減っている。教育間で実施前後の変化に有意差があることを示した ($p < 0.001$)。

2. 男女交際中の暴力認知と男女交際の意識

実施前に両教育群は、性感染症教育群より男女交際中の暴力認知が低かった。図1に示すように、男女交際中の暴力認知は、どちらの教育も受けた生徒共に、実施前に比較して実施後に有意に上昇したが、両教育群が性感染症教育群より、実施前後の変化が大きく、交互作用を認めた。教育間で実施前後の変化に差があることを示した ($p < 0.001$)。

男女交際の意識において、「男女の対等な関係」

(図2)と「相手を思いやること」(図3)は、実施前に両教育群は、性感染症教育群より意識が低かった。しかし、実施後に両教育群は、性感染症教育群より意識が高くなり交互作用を認めた。教育間で実施前後の変化に有意差を示した ($p < 0.001$)。「自分を思いやる」意識は、実施前に教育間に差がなかったが、実施後に性感染症教育群より意識を高め交互作用を認めた。教育間で実施前後の変化に有意差があることを示した ($p < 0.05$) (図4)。

3. 性感染症の知識と性行為の意識

性感染症の知識において、実施前に両教育群は、性感染症教育群より知識が低かった。しかし、実施後に両教育群は、性感染症教育群より知識が高くなっていった。どちらの教育を受けた生徒ともに、実施前に比較して実施後に有意に上昇した ($p < 0.001$)。教育間で実施前後の変化に有意差を示した ($p < 0.001$)。

性行為の意識として、性行為を誘われた時に拒否する意識は、両教育を受けた生徒は、実施前よ

り実施後でその意識を高めた ($p = 0.050$)。しかし、中学生・高校生で性行為をすることを拒否する意識や性行為を誘われた時に拒否する意識は、どちらの群も実施前後の変化に有意差を認めなかった。また、性行為の意識として、いずれの意識も、教育間で実施前、実施後、実施前後の変化に有意差を示さなかった。

4. 危険行動

両生徒ともに、危険行動として3か月間の飲酒経験率は、教育終了から3か月後の間に、クリスマスや正月といった文化的な行事があったため実施前より実施後に高まった。しかし、3か月間の飲酒経験率、喫煙経験率、性行為経験率および今までの性行為経験率のいずれも実施前後の変化に教育の違いによる有意差を認めなかった。

IV. 考 察

暴力予防教育と性感染症予防教育を組み合わせで受けた生徒は、性感染症予防教育のみを受けた生徒より、実施前と実施3か月後の変化において、

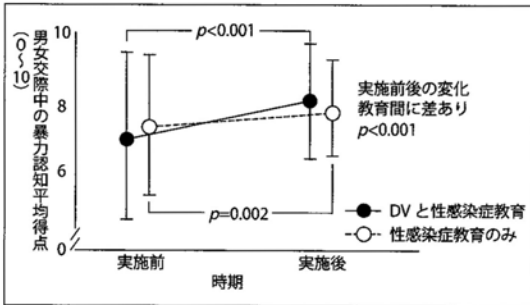


図1 男女交際中の暴力認知変化 (実施前後の変化, 教育間変化を重回帰分析)

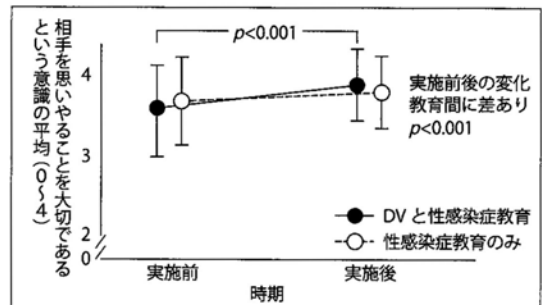


図3 相手を思いやることを大切であるという意識変化 (実施前後の変化, 教育間変化を重回帰分析)

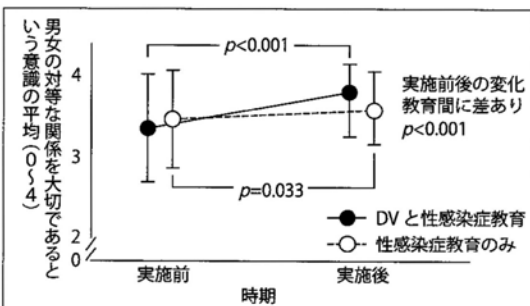


図2 男女の対等な関係を大切であるという意識変化 (実施前後の変化, 教育間変化を重回帰分析)

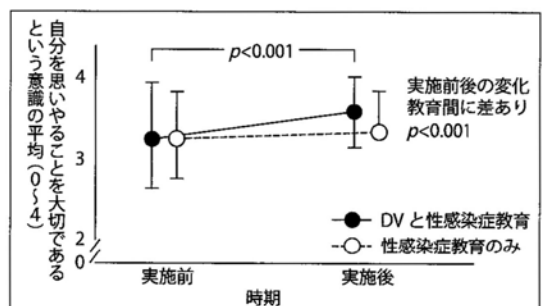


図4 自分を思いやることを大切であるという意識変化 (実施前後の変化, 教育間変化を重回帰分析)

親との会話のうち「子どもの意見を聞く」頻度、教員との「日常会話」、「健康の大切さ」、「子どもの意見を聞く」頻度を増やし、男女交際の暴力認知と性感染症の知識を高め、男女交際において「男女の対等な関係」、「相手を思いやること」、「自分を思いやる」という意識を高めた。教育の違いにより性行為の意識と性行為経験率に差を認めなかった。

1. 親・教員との会話頻度

暴力予防教育と性感染症予防教育を組み合わせたプログラムは、親との会話のうち「子どもの意見を聞く」頻度を増やしたが、「日常会話」、「命の大切さ」、「健康の大切さ」の会話頻度は変化させなかった。しかし、教員との「日常会話」、「健康の大切さ」、「子どもの意見を聞く」頻度も増やした。日本の研究において、親とエイズについての話題を促す取り組みの結果、教員とのエイズの会話頻度を増加させたが、親とのエイズの会話頻度を増やすことができなかったと報告している²⁶⁾。思春期までの親子関係において、性的な話題が話せない関係性の中では、容易に「命」や「健康」といった話題についても話すことが難しいと考えられる。齋藤らは、現在の子どもの教育者である保護者や教員は、自らが思春期に性教育を受講した体験が乏しく、正確な性知識を持たず、日本で一部を除き大学教員や教員研修でもセクシュアリティに関して学習する機会が少なく、性教育の理解が十分ではない教員が多いと指摘している²⁶⁾。田能村も、日本の教員養成課程で性の心理や生理、保健・医療などの教育は専門であっても、性教育というカテゴリを専門として、あるいは担当して研究し学生の教育に当たっている教官はわずかであると報告している²⁷⁾。このため大学時に学生の多くは性教育に関してほとんど教育を受けることなく、現場の教師となり、そこで性教育の研究、実践を求められるという状況にあり、日本の性教育は、まだ多くの戸惑いがあり、今日なお試行錯誤で行われているのが現状であると述べている²⁷⁾。一般的に日本の多くの学校で出前講座として専門家や医療系の大学生ボランティアなど外部講師として集団への講義形式で性教育が行われている。

外部講師として多くの学校で講義をしている齋藤らは、教員も保護者と同様に思春期の子どもをめぐる状況について理解が乏しいことを指摘している²⁶⁾。さらに、学校現場は社会との隔りもあるため、思春期の子どもたちを取り巻く保健医療従事者とネットワークをつくり、それぞれの地域で、保護者や教育関係者とともに情報交換や学習を行い、地域全体で子どもを教育していく体制を構築することが大切であると述べている²⁶⁾。男女交際の暴力について、社会的な関心は高まってきたが、保護者も教員もまだ正しい知識を十分に持っていない。そのため、中学生に対して予防教育を実践した経験がほとんどない。親と生徒との課題学習として思いやりのある関係や対等な関係について考えることを取り組んでもらったが、期待する効果があらわれなかった。しかし、中学校の教員が中学校生活で起こっているより身近な男女交際についての内容を生徒とデスクッションすることや男女関係のトラブルを考える機会を増やしたことで、実施後も「健康の大切さ」を継続して伝えることになったと示唆される。

2. 男女交際の暴力や性感染症に関する知識・意識・行動

暴力予防教育と性感染症予防教育を組み合わせたプログラムは、性行為の意識と性行為経験など危険行動は、両群間の変化に有意差を認めなかったが、男女交際の暴力認知や性感染症の知識を高め、男女交際において「男女の対等な関係」、「相手を思いやること」、「自分を思いやる」という意識を高めた。性行動に伴う危険を予防するために、中学生を対象に男女がお互いを尊重する関係をつくる暴力予防教育を取り入れることは有効であると示唆された。今回の調査結果は、実施前の調査において、教員との会話頻度、男女交際の暴力認知、性感染症の知識、男女交際の意識など、両教育群が性感染症教育群より低かったことが大きく変化した要因になったかもしれないと考える。現在、日本の中学校保健体育科の学習指導要領において、性感染症予防教育は必須であるが、暴力予防教育は必須ではない。学校側に性感染症予防教育だけでなく、暴力予防教育と性感染症予

防教育の両方を受けることを選択してもらったことと関係するかもしれないと考える。今後、対象者を増やし、介入群と対照群の統一化を行い、より厳密な調査を検討していく必要がある。しかし、今回の研究は、中学生への男女交際中の暴力予防の取り組みは、まだ十分に行われていない現状において、その教育効果を検証した貴重な研究であると考えられる。現在、他に実施されている男女交際中の暴力予防プログラムは、専門家やボランティアによる講義形式および体験型学習の手法を用いて行われている¹⁵⁾¹⁹⁾。NPO法人DVながさきでは、大学生・高校生を対象に、デートDV防止教育を学年単位や全校対象に60～100分の授業を行っている¹⁹⁾。また、鹿児島大学医学部保健学科に発足したボランティアサークルは、ピアカウンセリングや高校に向いて行うピアエデュケーションによるデートDV防止活動を実施している¹⁹⁾。いずれも実施前後の客観的な評価が示されていないが、その教育の必要性が報告されている。この研究によって、性感染症予防教育に暴力予防教育を組み合わせた教育は、性感染症予防教育のみより、実施前より実施後に男女交際中の暴力認知がより大きく変化した。野坂は、若者へのプログラムの効果を高めるために、教職員や保護者がデートDVについての正しい認識を持ち、適切な対応ができるようになる研修も必要であると提言している⁹⁾。男女交際における暴力について知識を持った専門家は、生徒だけではなく、生徒を取り巻く保護者や教員など、多くの人々が、男女交際や家庭内の暴力の存在に関心を持って、その予防に取り組むことが必要であると考えられる。そして、子どもも大人も社会全体が「男女がお互いを尊重する関係をつくる」ことが望まれる。そこから、性行動に伴う性感染症、望まない妊娠による人工妊娠中絶や交際中の男女のトラブルによって生じる事件・事故を予防することができる。さらに、男女交際における暴力について疑問がある生徒や実際に暴力の被害者または加害者になっていることを自覚して訴える生徒に対して、生徒のプライバシーに十分配慮して個別に対応することが、専門家に求められていると考える。

心身の発達とともに異性や性に対する関心や欲求が高まり、性的な男女の関係にいたる生徒が増える前の中学生の時期に、暴力予防教育と性感染症予防教育を組み合わせることは、男女交際において男女の対等な関係を育成するための意識を高める効果が示唆された。

研究の限界と課題

今回、両教育ともに、親と生徒との課題学習に取り組んでももらったが、期待する効果があらわれなかった。今後も親が教育に参加するためのより良い内容や方法を検討することが必要である。今回の報告では、実施前と実施後3か月の比較を行ったが、継続した長期のフォローアップを行うことが必要である。

結論

暴力予防教育と性感染症予防教育を組み合わせを受けた生徒は、性感染症予防教育のみを受けた生徒より、実施前と実施3か月後の変化において、教員との会話の頻度を増やし、男女交際中の暴力の認知や性感染症の知識を高め、男女交際において男女の対等な関係を育成するための意識を高める効果が示唆された。

この佐賀県予防教育事業にご参加いただいた中学校の生徒、保護者、教員の皆様と事業実施にご尽力頂いた関係者に深く感謝致します。

文献

- 1) Meschke, L.L., Bartholomae, S., Zentall, S.R.: Adolescent Sexuality and Parent-Adolescent Processes, Promoting Healthy Teen Choices. *J Adolesc Health*, 31, 264-279, 2002.
- 2) Swain, C.R., Ackerman, L.K., Ackerman, M.A.: The influence of individual characteristics and contraceptive beliefs on parent-teen sexual communications: a structural model. *J Adolesc Health*, 38(6), 753.e9-18, 2006.
- 3) 財団法人日本性教育協会：若者の性白書 第6回青少年の性行動全国調査報告小学館, 2007.
- 4) Brock, S.E., Lazarus, P.J., Jimerson, S.R.: Best practices in school crime prevention and intervention.

- National Association of school Psychologists 2002.
- 5) 野坂祐子：デートDVの被害・加害への介入支援。臨床精神医学, 39(3), 281-286, 2010.
 - 6) Martin, S.G.: Children exposed to domestic-psychological consideration for health care practitioners. Holistic Nursing Practice, 16, 7-15, 2002.
 - 7) McCloskey, L.A., Lichter, E.L.: The contribution of marital violence to adplescent aggression across different relationships, J interpersonal violence, 18: 390-412, 2003.
 - 8) Lederman, R.P., Chan, W., Roberts-Gray, C.: Sexual risk attitudes and intentions of youth aged 12-14 years, survey comparisons of parent-teen prevention and control groups. Behav Med, 29(4), 155-63. 2004.
 - 9) Kirby, D.B., Baumler, E., Coyle, K.K., Basen-Engquist, K., Parcel, G.S., Harrist, R., Banspach, S.W.: The "Safer Choices" intervention, its impact on the sexual behaviors of different subgroups of high school students. J Adolesc Health, 35(6), 442-52, 2004.
 - 10) Flay, B.R., Graumlich, S., Segawa, E., Burns, J.L., Holliday, M.Y.: Effects of 2 prevention programs on high-risk behaviors among African American youth, a randomized trial. Arch Pediatr Adolesc Med, 158(4), 377-84, 2004.
 - 11) O'donnell, L., Stueve, A., Agronick, G., Wilson-Simmons, R., Duran, R., Jeanbaptiste, V.: Saving sex for later: an evaluation of a parent education intervention. Perspect Sex Reprod Health, 37(4), 166-73, 2005.
 - 12) Barnett, J.E.: Evaluating "baby think it over" infant simulators: a comparison group study. Adolescence, 41(161), 103-10, 2006.
 - 13) Dancy, B.: HIV risk reduction among African American teenage girls. Am J Nurs. 106(12), 77-9, 2006.
 - 14) DiIorio, C., Resnicow, K., McCarty, F., De, A.K., Dudley, W.N., Wang, D.T., Denzmore, P.: Keepin' it R.E.A.L.!: Results of a mother-adolescent HIV prevention program. Nurs Res, 55(1), 43-51, 2006.
 - 15) 中田慶子：デートDVを知っていますか？若者たちのデートDVと防止教育について。助産雑誌, 61(1), 54-59, 2007.
 - 16) 鈴木ひとみ, 畑下博世, 川井八重, 福井香代子, 植村直子, 笠松隆洋：高校生の対人関係形成に影響する要因の検討—デートDVの潜在性との関連。滋賀医科大学看護ジャーナル, 7(1), 51-56, 2009.
 - 17) NPO法人エンパワメントかながわ：みらくるたいむ第7号. NPO法人, エンパワメントかながわ, 2007.
 - 18) 山口のり子：デートDV 防止プログラム実施者向けワークブック. 梨の木舎, 東京, 2003.
 - 19) 下敷領須美子：大学生・高校生を対象としたデートDV予防教育. 思春期学, 28(2), 214-220, 2010
 - 20) Nagamatsu, M., Sato, T., Nakagawa, A., Saito, H.: HIV prevention through extended education encompassing students, parents, and teachers in Japan, Environmental Health and Preventive Medicine, 16, 350-362 2011.
 - 21) 原健一, 永松美雪, 中河亜希, 齋藤ひさ子：中学生男女の親・教員との会話と男女交際及び性感染症に関する知識・意識・行動との関連, 思春期学, 30(2), 223-234, 2012.
 - 22) 内閣府：男女間における暴力に関する調査報告書, 内閣府男女共同参画局, 2008.
 - 23) Kelly, J.A., St Lawrence, J.S., Hood, H.V., Brasfield, T.L.: An objective test of AIDS risk behavior knowledge: Scale development, validation, and norms. J Behav Ther and Exp Psychiatry, 20, 227-234, 1989.
 - 24) 松本純子, 武田敏：介入アプローチの差によるHIV感染予防行動における自己効力感の比較, 思春期学, 21(4), 379-387, 2003.
 - 25) Nagamatsu, M., Yamawaki, N., Sato, T., Nagagawa, A., Saito, H.: Factors influencing attitudes to sexual activity among early adolescents in Japan, Journal of Early Adolescent in press (published online 2012 March).
 - 26) 齋藤益子, 井口一成, 高村寿子, 平岡友良, 村瀬幸浩, 木村好秀, 堀口雅子：思春期における性教育のあり方. 思春期学, 27(4), 351-360, 2009.
 - 27) 田能村祐麒：「性教育は転換期を迎えたか」性教育の立場から. 思春期学, 24(1), 26-29, 2006.

(受付：平成24年3月19日)
(受理：平成24年9月18日)